

第九話

「だからお前は――」

北川の低い声が途中で切れる。私がかぶせ気味に言ったからだ。

「おっさんのくせに、えらそうなんですよ」

控え室で、撮影の準備をしているときだった。何気なく吐いたその一言が、妙に空気を変えた。

「……毎回毎回、おっさんおっさんってお前は……」

「だって十歳も年上、おっさんでしかないもん！」

「ふーん。じゃあ試してみるか」

「は？」

「伊達にお前より長生きしてないってこと。体で」

ソファに押し倒され、北川の大きな手が太ももを開かせる。

「……やだ、ばか！おっさん！」

「いつまでその減らず口、叩けるかねえ」

低い声に笑いが混じる。けれど視線は真剣そのもので、まるでステ
ージのギターを見つめる時と同じ集中力が宿っていた。

顔を近づけられた瞬間、温かい吐息が敏感なところに触れてソラは
背を跳ねさせる。

「ひっ……！！」

次の瞬間、柔らかく湿った舌がそこに押し当てられた。

「ん、あっ……や、やめ……っ」

「やめるわけないだろ。まだ始まったばかり」

舌先で小さな突起を押し上げられ、上下左右にねぶられる。

じゅるり……といやらしい水音が、部屋の静けさに響くたび、腰が勝手に逃げようとする。

「逃げんな」

北川の声は熱を帯び、舌がさらに深く割れ目をなぞる。

吸い上げ、舐め回し、尖らせて押し込む。その動きのたびに、濡れた音が大きくなる。

涙がにじむ。けれど、それが嫌で流れているわけじゃない。

「ん……あ、ああ……っ、だめっ……！」

限界が近づくとたび、わざと力を緩めまた別の角度から攻め立てる。やがて、舌が抜け、代わりに太い指が押し入ってきた。

「お前の同年代、こんなことしてくれるか？ん？」

指先が膣内の奥をなぞり、すぐにそこを擦り上げる。

くちゅ、くちゅ、ぐちゅっ……。

「な、なにそれ……だめ、だめえ……っ」

「ここ好きだろ。さっき舌入れたとき、めっちゃ締まった」

指が二本に増え、さらに激しくかき回される。腰が震え、足の力が

抜ける。何度も小さな絶頂が押し寄せ、呼吸が荒れた頃。北川が上体を起こし、ベルトを外す音がした。ソラの瞳が揺れる。

「腹立つくらい、エロい身体してんな、お前」
先端が濡れた入口に押し当てられ、ぬるりと沈んでいく。

「っ……あ……!」

一気に奥まで突き立てられ、視界が白く弾けた。
膣奥を押し広げられる感覚に、涙がまたあふれる。

「や、やだ……おっきい深い……っ」

「泣くな。まだこれからだ」

腰が打ちつけられるたび、ばちゅん、といやらしい音が鳴る。

奥まで突かれ、擦られ、また突かれる——その繰り返しに、意識が薄れていく。

「んあ……っ、や……やめ……あっ、だめっ……！」

「やめねえよ。何回でもイけ」

何度も絶頂に追いやられ、ソラの身体はすでにとろけきっていた。

目の焦点が合わず、口元はゆるんで息だけが漏れる。

それでも北川は手を緩めない。腰の動きはむしろ加速し、指でクリを弾きながら奥を突き上げ続ける。

「……ずるい……ほんと、ずる……い……」